

「技術と社会」部門功績賞を受賞して

村田 良美

このたびの部門功績賞受賞は、私にとってまったく思いがけないことであり、すでに授賞式が終わり、賞状と盾をいただいているにもかかわらず、未だ実感がわきません。ただ今回の受賞の栄を知らされ最初に感じたのは、年月を経ていつの間にか少なくとも年齢だけは受賞に適するものになっていたのだということです。思い起こせば、「技術と社会」部門の運営委員になったのが今から約 15 年前の 1990 年中ごろで、機械学会に部門制度が出来てから数年のことです、各部門が組織の形を追い求めている時期でした。特に我々の部門は、他の専門部門と違い(もちろん技術教育、技術史・工学史といった分野はありますが)、しっかりとした核になる技術対象が存在するわけではありません。しかし部門に所属する皆さまの、今までにない新しい部門を作り上げたいという意欲が強く感じられたのを良く覚えております。また我々の部門は他の専門学会あるいは機械学会の他部門と比較して、非常に家族的な雰囲気があり、学会活動を楽しむことができました。私自身は、部門運営参加を通して、城下莊平先生他のご尽力により開始された極めてユニークな文理融合型国際会議である ICBTT0210、そして部門をベースに作られた堤一郎先生による機械遺産小委員会とその発展形である機械遺産委員会、技術士会メンバーの支援をいただいている技術者倫理講習会などにも携わることができ、一味違う学会活動を経験させていただきました。またその活動を通して、多くの産官学の方とも知り合うことができましたことも大きな財産になっております。機械学会他部門や他の専門学会の活動では知ることがなかったであろう経験をできたことは非常に幸運であったと感じております。

皆さまご存じの通り「技術と社会」部門は、他の専門性に基づく部門と異なり、部門横断的な事象をも取り扱うことができる、非常に自由度の高い部門です。良く言われることとして、他の専門部門あるいは支部と云う縦系の中を潜り抜ける横系に例えられます。その意味で学会本部からの部門に対する期待度は極めて高く、その期待にこたえられる組織作りが必要となります。私が部門長を拝命した 84 期(2006 年度)はちょうど部門支部活性化委員会の部門評価の時期と重なります。その時委員の方々から様々なご指摘をいただきました。実施回数が今年度で 130 回を超えるイブニングセミナー、文理融合型国際会議である ICBTT は非常に高い評価を受けました。ただ部門としての全体的な活動レベルは不十分であること、他部門あるいは学会外組織との連携活動への取り組みも不十分であること、部門の独自性を発揮した社会貢献や地域との共同事業等も期待したレベルに達していないこと等を指摘されました。部門活動の広報強化の要望も強くありました。その際言外に指摘されたのは部門の閉鎖性を排し、より開かれたものにしていくべきであるということでした。当方で主張した技術倫理委員会、法工学専門会議(旧法工学部門)のインキュベーターとしての役割が全く評価されないことなど納得がいかない点もありましたが、全体としては部門の将来性に期待を寄せた妥当な評価だったと思います。

その後の歴代部門長のご尽力により、2010 年度に行われた部門評価も大きく改善し、部

門の将来にもやっと光が差してきた感があります。しかしこれからが非常に重要な時期であり、より多くの継続的な努力が必要な時でもあります。NHKの新会長に25日付で就任した前JR東海副会長の松本正之氏が言われるように「現状維持は後退につながり、組織の存立を危うくする。今の業務のあり方に疑問を持つ習慣をつけて、人、物、金を最適な形にシフトすべき」と考えます。

技術と社会部門は開かれた部門であってほしいと思います。人材についても他部門からも積極的に登用するなど常に新しい血を導入することが必要不可欠と考えます。また部門の特色を生かした企画を発掘し、発展させることが必要です。幸いにして本部門が担当すべきテーマは無尽蔵にあります。少し思いついただけでもシニア活動支援、テクノツーリズム、中高生への理科教育、理工系への進学への勧誘、技術者の地位向上、JABEE と技術士制度との連携などさまざまな課題が考えられます。部門横断的あるいは学会外組織との連携企画を積極的に実施することも必要です。その意味で、新エネルギーコンテスト、交通・物流部部門との連携企画は非常に良い活動と思います。一方で部門の活動と成果を積極的に公表する体制の構築も重要です。部門活動内容を外部にアピールするためにはホームページの充実とメンテナンスなど広報の強化が欠かせません。

2011 年は部門設立 20 周年にあたっております。現執行部には、この機会に是非これまでの部門運営を再度見直し、今後の部門の発展に寄与する中長期的運営方針を立てていただきたいと思います。

以上思いついたことを勝手かつ無責任に述べさせていただきました。

最後に改めて受賞の栄に感謝し、有難いご指導を頂いた多くの先達、献身的協力をいただいた皆様に心より御礼申し上げます。

---

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.24

(C)著作権:2011 社団法人 日本機械学会 技術と社会部門